小学生向けドキュメンタリーシリーズ　いま、子どもたちは

かあさんのカギ

山花郁子

著者紹介

山花郁子（やまはな　いくこ）

1931年，東京に生れる。
実践女子大学文学部卒業。現在，調布市役所児童青少年課に勤務。図書館司書，司書教諭の経験を生かして，地域の読書運動に力を入れている。
主な著書に「わかれ道おもいで道」「みどりの風のように」（岩崎書店）などがある。

日本音楽著作権協会承認番号
第8213956号

NDC 913.
189 p. 19.4 cm

遠藤豊吉／責任編集

いま，子どもたちは　4

かあさんのカギ

昭和58年4月　第1刷発行

著　者　山花郁子
発行者　渡邊紫郎實
発行所　株式会社フレーベル館
東京都千代田区
神田小川町3の1
電話 東京(292)7781(代)
振替 東京 9—19640
郵便番号　101

印刷所　凸版印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

8393—6604—7346
Printed in Japan.

かあさんのカギ

山花郁子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

まえがき

「お母さんたらさ、いうんだ。

〝へそのおがきれても、あなたとは、みえない糸でずうっーとつながってるんですからね。

もし、非行少年になりかけたら、お母さんのおなかがチクチクっとして、ちゃーんとおへそがサインをだしてくれるのよ〟

なーんて、おどかしちゃってさ。」

四年生になった雪夫君は、いつまでも子どもあつかいはごめんだとばかり、口をとんがらせて、わたしに話してくれました。

「そのかわり、雪夫君がいいことしてると、きっとお母さんのおへそが、むずむずっとして、うれしくなってにっこりするんじゃないの？」

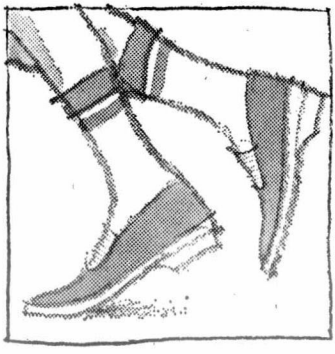
「あっ、先生たら、お母さんとおんなじことといってる！」

雪夫君は、首をすくめて、〝ウフフ〟と笑いました。

わたしのまわりには、いつもちいさな友だちが、たくさんいます。
あたらしい友だちがふえるたびに、わたしは、雪夫君のことばをおもいだすのです。
〝みえない糸で、つながっている……〟
ほんとにそうです。
人と人との出会いは、ふしぎな糸でつながっています。
この本に登場する四人のお友だちと、この本を読んでくださるみなさんとは、もうお友だちです。
みんな、どこかで、一生けんめい生きています。
みえない糸でつながっているみなさんのおはなしも、いつかきかせてもらえることをねがっています。
お友だちが多ければ多いぶん、自分のはなしがふくらんで、たくさんのあたらしいおはなしが生れます。
まず、朋子(ともこ)ちゃんやきよし君、みみちゃんやなっちゃんと、なかよしになってください。

もくじ

いつか　きっと……7
大黒柱の五年生……47
かあさんのカギ……93
アカナーのおくりもの……145



装丁　福島　博
装画　岩淵慶造

いつか　きっと

―わたし、河村朋子（かわむらともこ）のはなし―

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

〈西野先生〉

四年生になって担任が西野先生にかわりました。考えてみると、毎年新しい先生にかわって、男・女・男・女の順に入れかわっています。

一年生のときは、長坂登先生。二年生は北方郁子先生、三年生のときは高谷茂雄先生、そしてこんどが西野実先生です。

西野先生って、どんな先生かしら？　やっぱりはじめての先生はなれるまで不安です。

教室に入ってきた西野先生は、スラックス姿で、パーマをかけていない髪を短く切りそろえていました。きびきびと活発そうな先生です。

ふと目があったとき、とてもやさしい表情でわたしをみてくれました。ふわっとあたたかいきもちになり、わたしは〝よかった〟とおもいました。

「きょうからわたしが四年二組の担任になります。わたしは家ではお母さんですけれど、学校では四年二組の先生です。だからこの組のみんなのひとりひとりの先生になるために、一

生けんめい勉強します。毎日勉強します。仲よくいっしょに勉強しましょう！」

つづいて三回勉強ということばが出ました。ずいぶん勉強が好きな先生のようです。ガリ勉ですごーく真面目な先生なのかしら。

「みんな、先生が勉強、勉強っていうからびっくりしちゃったかな。でも勉強するって、とっても大事なことなのよ。」

先生は黒板にむかって、

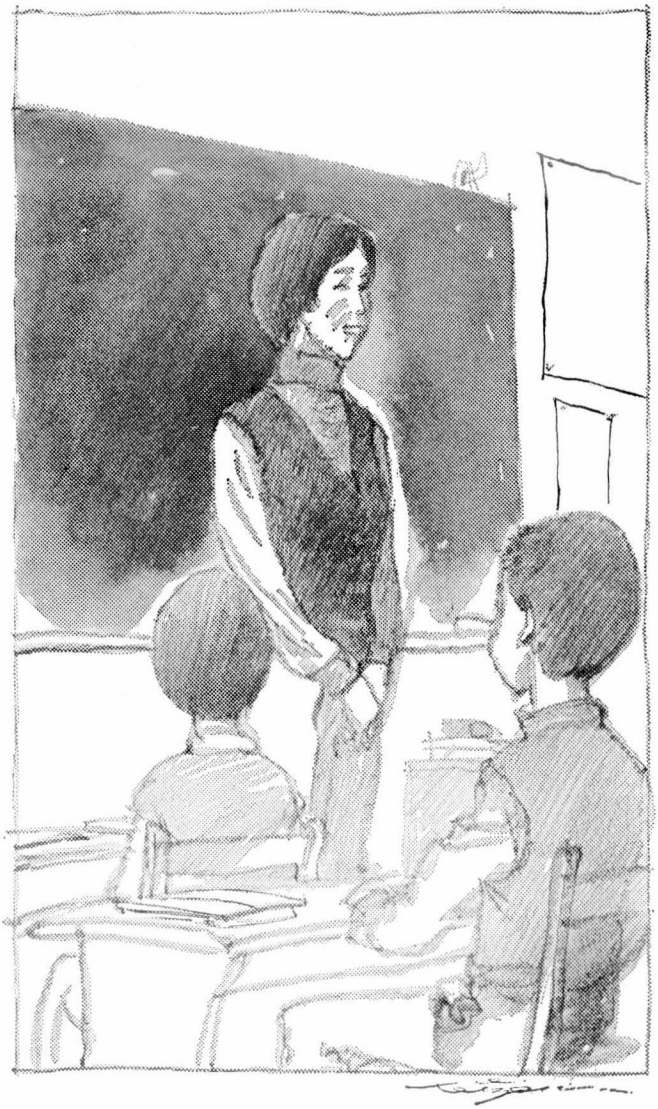
一、精を出してつとめること。

二、学問に身を入れること。

三、商品をやすく売ること。

と、書いてから、ふりかえってにっこりしました。

「広辞苑という厚い辞書をひくと、こういうふうに勉強の意味がかいてあります。まず、一に、毎日健康じゃなくっちゃ、勉強ができないでしょう。精というのは心身の力、元気っていうことね。二つ目の学問ということは、学び習うこと、そして身を入れるっていうことは、



頭で学ぶだけでなくて、手と足をつかって、身体で学ぶってことよね。それから三つ目、これちょっとおもしろいでしょう。ほら、よくお店の人が値段を負けてくれるときに〝勉強しときますよ〟っていうでしょう。お店の人は一生けんめい商売に精を出して、安くしてもその品を売った方がいいと考えてから値段をひいてくれるわけよね。つまりこれからもお客さんによろこばれることを勉強しとくってわけかな。わかる？」

――手や足をつかって体中で学ぶこと――

先生がいったときわたしの足がピクンと動きました。

〝先生、わたしふつうの人のように足が自由にならないの。だからあんまり足をつかって勉強することはできないわ。体操の時間はいつも見学するんですもの〟

でもわたしの声は、西野先生にはとどきません。

「きょうは、いちばんはじめの日だから、本を読んであげましょう。あっ、いちばんはじめの日だけじゃなくて、これからも本はできるだけたくさん読んであげますよ。きょうは先生が持ってきた絵本をよみますけれど、こんどからみなさんのリクエストに応じます。読んで

もらいたい本があったら、どんどんいってちょうだいね。」

〝あっ〟といったとき、先生はポンと自分のおでこをたたいて首をすくめてみせました。

たのしい先生だな、それにいつも本を読んでくれるときいてわたしはとてもうれしくおもいました。やっぱり体を動かすことより、わたしはその方が好きですから……。

先生がとり出した本は、なんだか小さい子がみる絵本のようでした。

先生はまず、『わたし』という題を一字ずつくぎるように読んでから、最初のページをめくりました。それから、高くかかげるようにしてうしろの席の人にもよく見えるようにしてくれました。

——わたし、おとこのこから　みると　おんなのこ——

西野先生は、ゆっくりと読みすすめます。

〝女の子からみても、わたしは、女の子にきまっています〟

心の中でまぜかえしながら、わたしは、すまして、先生の表情をうかがいました。

——せんせいから　みると　せいと——

〝そうです、そうです。いろんな生徒がいますよ〟

調子づいて、心の中でおしゃべりをつづけていたら、ふと顔をあげた先生と目があってしまい、あわてて、しせいを正しました。

この絵本に登場するわたしのなまえは、みちこです。

やさしいことばで、いろいろな人とかかわらせながら、みちこというわたしが、紹介されていきます。

――ほこうしゃてんごくでは、おおぜいのひとり――

最後の場面を意味ありげな声で結ぶと、先生はパタリと絵本を閉じ、「おわり」といって、ていねいにおじぎをしました。みんなは、パチパチと手をたたきました。

絵本もおもしろかったけど、みんなの拍手は、新しい先生をかんげいする拍手です。

〝先生、合格よ〟

わたしはみんなといっしょに拍手をしながら、心の中でかんげいのことばをのべました。

〝西野先生はおうちではお母さん、そして学校では四年二組の先生、そして、わたし、西野

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.